

日本語テキスト
Manga de Kaigo
付録

漫画原作

&

クイズ解答集

2016年8月16日

海陽光二

日本語テキスト Manga de Kaigo

漫画原作

舞台：東京都内の特別養護老人ホーム さくらホーム

時期：3年前から今年まで。

登場人物：主人公は二人（女性の利用者佐藤サダとネパール人女性介護士クマーリ）。サダは3年前の入所時85歳でいわゆる認知症（アルツハイマー型）を患っている。その他ホームで働く人々や家族などが登場する。

物語の基調：サダは今年88歳で死亡することになっており、結果的には哀しい物語であるが、奇想天外な展開を織り込み、喜怒哀楽に富んだ物語である。この物語はサダの自己実現の物語であるが、外国人介護士の人間かつ介護士としての成長物語でもある。二人は単に介護サービス利用者と介護サービス提供者というビジネス的関係を超えた深い原人間的関係の中に入っていくことになる。多くの場面は私が介護現場で体験したことに基づいているが、物語作りということで現実離れした場面が出てくることもある。各話の後で、私が大切だと考えている介護のエッセンスを解説する。

物語のあらすじ：サダは3年前に老人ホームに入所しており、ネパール人介護士クマーリが赴任する場面から物語は始まる。当初サダは外国人のクマーリを快く思わないし、日本人介護士もクマーリを受け入れようとはせずいじめたりする。ついにクマーリは仕事を辞めたいと思うようになるが、サダと心の交流を深めていく中、段々と介護の仕事に魅せられていく。そうこうしているうち、周りの日本人介護士たちもクマーリの仕事振りや人間性に共感するようになり、仲間として認めるようになる。ところが、サダの状態は段々と悪くなり、クマーリが働き始めて3年後にホームで最期を迎える。サダは死ぬ直前に必死の踊りを披露する。クマーリはサダの死を悲しむが、これからも日本で介護の仕事の続けようと決意する。

介護の豆知識 その1：いわゆる「認知症」

いわゆる認知症とは簡単に言えば、「認知機能が低下したため生活障害が起きている状態」のここのようだ。いわゆる認知症は病気だと言われるが、この言い方はちょっと誤解を招きやすい。というのは、厳密に言えば広義の病気には疾患(disease)、病気(sickness)、病い(illness)の3分類があり、「認知症は病気である」と言う場合、どの分類のことを言っているのかが不明だからだ。疾患(disease)とは医学的な原因疾患のこと。狭義の病気(sickness)とは社会的な観点から見た場合の言い方。最後の病い(illness)とは当事者本人の主観的立場から捉えた言い方。結論から言えば、いわゆる認知症は disease の原因疾患ではなく sickness の病気に相当する言い方のようだ。すなわち、いわゆる認知症とは医学的な原因疾患を指す言葉ではなくて、上に書いたような状態のことを言っているのに過ぎないのだ。例えば、アルツハイマー病は原因疾患であり、その結果生じる障害を社会的なものとしてアルツハイマー型認知症という病気だと言っているのである。

すなわち、いわゆる認知症は社会的に障害や問題があるので大変だと言っているのである。つまり、社会の方から見た障害であり問題なのだ。そこには当事者本人の視点が欠落していないだろうか。これでは姥捨て(老人を捨てる)の考えと同じ発想である。

そうではなくて、やはり当事者目線に立った理解が大事ではないだろうかということで、第3の分類である病い(illness)という考え方が参考になるかもしれない。あくまでも一番困っているのは当事者本人である。本人の主観的な世界に立脚した理解が求められると私は考える。

そもそも「認知症」という言葉は嫌いだ。以前は「痴呆」と呼んでいたのを、差別表現だとして2004年に政府が名称を変更してしまった。確かに「痴呆」という言葉も褒めたものではないが、「認知症」という言葉もかなり問題だ。というのは、「認知」というのは知覚から始まって判断、推論、思考、感情など全ての脳活動を含んでしまうからだ。そうであれば「認知症」の人は全ての脳活動が低下してしまった、それこそ困った人だという偏見が広まってしまう。現実を見ても、世の中ではそれに近い偏見があるように思うのは私だけであろうか。更にこれは冗談だが、私は「認知」と言われると真っ先に「子供の認知」を思い浮かべてしまう。だから、私は「認知症」の前に「いわゆる」を付ける。

ではどうすればいいのだろうか。私は、医学的に原因疾患をアルツハイマー病だとか、脳血管性疾患だとか、レビー小体病だとか、ピック病だとかに分類するのはどうぞ勝手にどうぞ、という立場だ。きっと役所の立場では行政用語がどうしても必要なかもしれないが、「認知症」などという社会的な病気分類は必要ないのではないか。それぞれの原因疾患の症状として議論することはいいが、いくつもの原因疾患の症状の共通名称をわざわざこしらえる必要は果たしてあるのだろうか。そんなことよりも、一人一人の当事者の立場に立って、あるいはその世界に入って行って、いろいろ対処していくしかないのではないだろうか。

以下の原作においてもその辺のことをいろいろ考えていくつもりである。

第1話 ～ここは地獄？～

場所：さくらホーム 1階事務所前と3階認知症フロア

時間：3年前の春 ある日の午前

物語：クマーリがさくらホームで働くことになり、初めてホームに来た。ホームの外は桜満開だ。施設長の大坪が事務所前でクマーリを皆に紹介する。

大：「みなさん、今日から一緒に働いてくれるクマーリさんを紹介します。クマーリさん、前へどうぞ。自己紹介をお願いします。」

ク：「みなさん、おはようございます。クマーリと申します。私はネパール人です。これからどうぞよろしくをお願いします。」スタッフは拍手したが、あまり歓迎している様子ではない。

大：「それでは森さん、クマーリさんをフロアの利用者さんに紹介してください。」クマーリは先輩介護士である森の後に付いて3階の認知症フロアに行く。途中不思議な絵が目に入る。

ク：「森さん、これは何ですか。」

森：「それは曼荼羅です。仏教の世界を表しているそうよ。」3階に着く。

森：「ここはスタッフルームです。」それからお風呂場、トイレ、医務室、休憩室、最後にデイルームを紹介。

森：「サダさん、こちらは新任のクマーリさんです。」サダは聞いているだけ。

ク：「サダさん、はじめまして。クマーリと申します。どうぞよろしくをお願いします。」

森：「たけしさん、新任のクマーリさんです。」

た：「何歳？」

ク：「はい、私は22歳です。」たけしは彼女が若いと嬉しそうに、クマーリのお尻を触ろうとする。クマーリはびっくりしたが、気を取り直して、

ク：「たけしさん、どうぞよろしくをお願いします。」

森は他の利用者にもそれぞれクマーリを紹介した。その時デイルームには20人位の利用者がいた。叫びながらテーブルを叩く者、大声を上げて何かを呼んでいる者、涎を垂らして笑っている者、ただ黙っている者、車イスで辺りを駆けずり回っている者、眠っている者等々、クマーリが生まれて初めて目にする光景だ。しばらくするとクマーリは心臓の鼓動が速くなり、頭がくらくらしてきた。クマーリは心の中で「ここは地獄？」と叫んでいた。

介護の豆知識 その2：「本音と建前」

これは日本独特の文化として世界的に有名だ。「本音」とは心の中の気持ちで「建前」とは表向きの態度。日本人は両者が食い違っていることが多いとよく言われる。ただこの現象は日本人に限らずどの国の人にもあるはず。ではどうして日本人の悪い点として指摘されるのであろうか。多分、多くの日本人が自分の考えを表に出さないからであろう。

今後日本でも自己主張の強い人が多くなることも予想されるが、現時点ではまだまだ少数派である。とにかく、日本に初めてくる外国人はこの日本の文化にまず気付き慣れるのが大切だ。でも、日本人の真似をしなければいけないということではもちろんない。日本人のやり方を尊重しながらも、やはり自分の言いたいことがあれば自己主張をすべきである。もちろん、言い方には十分気をつける必要はあるが。

介護の豆知識 その3：「仏教と曼荼羅」

日本の宗教と言えば仏教となるが、実際の日本人は、そんなに宗教心は深くない。でもお寺も多いし行事も多い。外国人介護士も必須の知識だ。

曼荼羅はチベット仏教で使われる円か四角をした模様図である。仏教の深遠な世界を表現している。有名な心理学者である C.G.Jung（以下ユング）はこの曼荼羅に触発されて無意識の思想を深めていったという。

介護の豆知識 その4：「地獄」

認知症フロアは地獄だと錯覚するかもしれない。ずっと黙って何もしない人、大きな声で叫ぶ人、テーブルを何度も叩きつける人、あちこち徘徊している人。何か、彼等の怨念と怨嗟が渦巻いているような物凄い雰囲気を感じる。この世ではない感じだ。実際私は介護専門学校在学時の第1回目実習当初の3日間まさしく地獄に来たような錯覚に襲われ、胸の鼓動が治まらなかった。初めてこの現場に来る外国人介護士の中にもそのような感覚に陥る人がいるかもしれない。

第2話 ～家に帰りたい～

場所：さくらホーム サダの個室

時間：第1話の翌日 夕方

物語：サダがベッドに横たわりながらすすり泣いている。大変不安な顔をしている。

そして、サダは体を起して叫び始めた。

サ：「ここはどこ？」「今何時？」「私すぐに家に帰らなくちゃ！」

サダの声を部屋の外から聞いたクマーリが心配して部屋に入ってくる。トントン。

ク：「サダさん、どうしましたか？」サダが叫んでいるので動揺する。

サ：キョトンとして「あなたは誰？」

ク：「昨日挨拶したのに」と思いながら「私はクマーリと申します。」

サ：不審そうな顔をして「ガイジンさん？」

ク：「はい、私はネパール人です。どうぞよろしくお願いします。」

サ：「なぜネパール人がここにいるの？」「ここはどこなの、教えて！」

「ガイジンさん」という言葉にクマーリは傷つき泣き顔になる。

ク：「ここはさくらホームです。サダさんのおうちですよ」

サ：「うそ！私の家じゃありません。ここは病院？それとも監獄？家に帰りたい！！」

サダは一人でベッドから離れようとする。危ないのでクマーリは何とか介抱する。

サダは強く抵抗して、どうしても外に出ようとする。クマーリは困った揚げ句、

ク：「わかりましたサダさん。じゃ一緒におうちに帰りましょうね！」

サ：「そう、あなた、良い子だね！」

サダはとても元気になり、二人は仲良く手をつないで部屋の外へ出ていく。

介護の豆知識 その5：「夕暮れ症候群」「帰宅願望」

いわゆる認知症の方は施設に入所した直後は必ずといっていいほど帰宅願望がある。その理由にはいろいろあろうが、心理学的に言えば不安な気持ちの現れである。不安は老人最大の心理現象である。「死に行く不安」「病気になる不安」「孤独感」などなど。

不安な気持ちを解消するには昔住みなれた「家」に帰るのが一番の早道である。だから、老人は帰宅したがらる。現在住んでいる老人ホームでどんなに親切な扱いを受けていたとしても、やはり本当の「自分の家」にはなれないのだ。もちろん、ホームでの生活に満足していない場合はなおさら帰宅願望が強く出てくることになるだろう。

では、その「自分の家」とは一体どの家のことだろう？ホームに入る前に住んでいた家にたとえ戻ったとしても、きっとまた「家に帰りたい！」と言うだろう。実は「自分の家」とは「昔の思い出の懐かしい家」のことなのだ。記憶の中の家なのだから現在は存在しない家だ。だから、そんな家と一緒に探しても見つかりっこない。だから、帰宅願望が出た場合の対応は結構難しい。一般的な方程式は存在しない。

介護の豆知識 その6：「ガイジンさん」

残念ながら、日本にはまだまだ外国人に不慣れな人が多いのも事実だ。特に、高齢者に多い。この「ガイジン」という呼び方も外国人に対する蔑称の代表だと考えられる。(一部の人は、日本人は4文字熟語が好きだから単にガイジンと呼んでいるだけだと言っているが、それは脳天気な見方であろう)

だから、外国人介護士も職場で「ガイジンさん」扱いを受けること必至である。利用者さんだけでなく、一緒に働く日本人からもそういう扱いを受ける可能性がある。同じ日本人として本当に情けないし、誠に申し訳ないと思うが、外国人介護士はこのことを絶対に肝に銘じておくべきである。本原作でも大きな主題の一つである。

介護の豆知識 その7：「病院・監獄」

老人ホーム内部の作りは病院そっくりだ。中心部分にナースステーションのような部屋(以前は介護施設でもこの名前が使われているところがあったが、現在はスタッフルームという所が多い)があって、その周りに各部屋が配置されている。だから利用者さんも家族の方も最初は病院と勘違いするかもしれない。

また監獄とはきつい言い方だが、原則利用者は勝手に外出できない。それどころか一日中同じフロアにすることが多い。大体日課も決まっている。だから、24時間管理されているという意味で監獄にいるみたいだと皮肉ってみたくもなる。もちろん、余計な話かもしれないが、現代文明社会は大なり小なり管理社会であると言えるから、別段老人ホームだけが監獄みたいなわけではない。

第3話 ～子供が待っている～

場所：さくらホーム 中庭

時間：第2話の直後

物語：サダとクマーリは一緒に中庭を歩いている。

ク：「サダさん、遅くなりましたから、もう帰りませんか。」サダは黙っている。

ク：「どうしておうちに帰りたいたいですか。」

サ：怒りながら「子供たちがお腹をすかせて待っているわ！！」

ク：「そうですか。サダさんには何人子供がいますか。」

サ：「二人よ。上の子が娘で下が息子よ。」子供のことを聞かれて嬉しい気分。

二人は狭い中庭を何回も周回する。

ク：「サダさん、おうちはまだですか。」

サ：不安げに「おかしいわね。このあたりなのに。」

そこへ先輩介護士の森がやってくる。

森：優しく「おうちから電話がありました。お子さんたち、お父さんと食事に出かけたそうですよ。だから、ホームで一緒にご飯を食べませんか。」

サ：「そうですか。それじゃ、帰ってもだれもいないし。じゃホームに帰りましょう。」

3人はホームの中に入っていく。

森：クマーリに向かって「だめですよ！外は寒いから風邪引いたらどうするの！！」

森は心の中で「だからガイジンには任せられない」と毒づいていた。

ク：心の中ではどうも納得がいかないが、「どうもすみません。」

介護の豆知識 その8：「徘徊」

24時間ずっと老人ホームに住んでいると、いわゆる認知症の方だけではなく、どの老人も外に出たがる。これは当たり前の心情だと言えるが、施設側としては安全上勝手に外出するのは原則禁止だ。誰か介護士がついて行って初めて許可される。「徘徊」という行為は目的がなく歩き回ることなのだが、認知症の方の外出にはそれぞれ目的がある筈である。だから、本来それらを単純に「徘徊」と呼んでいるのは実は人権無視であろう。何か別の呼称はないのだろうか。「散歩」では軽いしね。

だから、彼らが外へ出たがる本当の理由や事情を真剣に考えて対応をする必要がある。

でも、実際の対応は時間の制約もあり大変なので、今回の事例のように、嘘をついてその場をごまかすことが多くなってくる。ただ、その後同じことが繰り返されることになってしまうのではあるが。クマーリは確かに風邪になる危険性を考えていなかったことは反省すべきであるが、嘘をつくという行為に対しては疑問に思っている。その考えは正しい。

第4話 ～食べたくない～

場所：さくらホーム デイルーム

時間：第3話から数日後 昼食の時間

物語：サダはテーブルの所定の位置に座っている。隣に利用者の井口たけしがいる。

たけしは左半身マヒで車イスを使用している。クマーリが二人の間に座って二人の食事介助をしている。サダはあまり食が進んでいない。

ク：「サダさん、このお魚美味しそうですよ。食べますか。」でもサダは黙っている。すると、たけしが「まずい！魚は食べたくない。肉がほしい。」と大声で叫び始めたので、クマーリはたけしの対応に追われっぱなしとなり、サダへの介助が疎かになる。すると、先輩介護士の森がやってきて、

森：「クマーリさん、だめよ！サダさんは何も食べていないのよ、それでいいの。」

ク：「すいません。サダさん、はい、食べましょうね。」それでもサダは食べようとはしない。困ったクマーリはどうしていいかわからない。隣のたけしは相変わらず騒いでいる。すると、森は突然スプーンで食べ物を無理やりサダの口の中に入れて始めた。サダは最初抵抗をしていたが、森はとても上手なやりかたでどんどん食べさせる。その技術は惚れ惚れするほどだ。森は「やっぱりガイジンさんは役に立たない！」と思いながらそこを離れる。クマーリは心の中では「でも、無理に食べさせていいのだろうか？」と疑問に思っている。サダはほぼ食べ終えたが、ぼーっと放心状態。クマーリは心配して、

ク：「サダさん、大丈夫ですか。お茶か水飲みますか？」すると、突然サダは、口の中から大量に食べ物を吐き出してしまった。サダはクマーリの顔を睨んでいる。

介護の豆知識 その9：「食事介助」

一見食事介助は簡単そうに見える。でも、中には対応が難しい利用者も大勢いる。よくあるケースは食べようとはしないこと。その原因はいろいろある。お腹が一杯で食べたくない場合、体調が悪い場合、何か心配事がある場合、食べることが判らなくなった場合、途中で寝てしまう場合等々。

本来であれば食べない原因をきちんと把握した上で対応すべきだが、介護する方は栄養摂取の必要性を考え過ぎたり、仕事を早く終わりたいがために、とにかく食べさせようとする場合もあるようだ。ベテランの介護士は口をなかなか開けない利用者の口を上手に開け、食べ物を上手く流し込む技術を心得ている。いわゆるコツがあるのだ。

逆に、人の食事を横取りしたり、手で食べたり、食べ物以外のものを食べたりする利用者もいるので大変だ。

施設では一日三食提供が原則だが、そのため食事介助に使う時間も多し、各食事の間の時間も短い。本当に一日三食必要なのか疑問である。ちなみに、江戸時代は一日二食が主流だったそうで、今日でも相撲力士は一日二食なのだ。

第5話 ～お腹すっきり～

場所：さくらホーム サダの個室とトイレ

時間：第4話の昼食時間の後

物語：サダは食事の後個室に戻りしばらくベッドに横たわり休憩を取っていた。

そこへクマーリがトイレ誘導のために来た。

ク：「サダさん、ご気分はいかがですか。」サダは答えない。

ク：「この頃トイレに行く回数が1日2、3回で少ないようですね。」サダは答えない。

ク：「サダさん、これからトイレに行きませんか。」サダはまだ黙っている。

ク：「お風呂に入る前にトイレに行きませんか。」

サダはあまりにもクマーリがしつこいので、

サ：「あなた、そんなにトイレに行きたいなら、自分一人で行きなさい！」

クマーリはサダがまだ外国人である自分を気にしていないので寂しくなる。

そこへ、看護師の吉田が見回りの為に部屋に入ってくる。

吉：「サダさん、お腹の物を出さないと体に悪いですよ。トイレまで一緒に行きましょう。」

サ：「はい、看護婦さんわかりました。」

サダと吉田は二人で部屋を出てトイレに行く。その後をクマーリが付いていく。

クマーリはトイレの外でサダが用を足すのを待っている。(吉田はいなくなる)

ク：「サダさん、終わりましたか。」でも返事がないので心配になり、クマーリはトイレの中に入っていく。すると、便器の周りに大量の尿と便が散らかっている。そしてサダは便をトイレの壁に塗っているではないか。

ク：「わ、サダさん、何をしていますか！！」

サ：「あ～、すっきりした。あなた、掃除しておいてね。」

クマーリはサダがわざと自分を困らせるために排尿・排便を便器の外でしたのではないかと疑ってしまうほど、サダのことがわからなくなってしまった。

介護の豆知識 その10：「トイレ誘導」

大袈裟に言えば介護*の半分は排泄介助*である。排泄介助と言えばオムツ交換であろうが、理想的な介護ではオムツを履かせないようにすることが重要視される。一時「オムツはずし」運動が各地で起きた。そして、おむつ外しをするためには、利用者の生活リズムに合わせたタイミングで定期的にトイレ誘導が必要となる。しかしこれでは、介護の負担がとても大きくなる。だから、最近ではオムツの性能が向上したり、おむつパンツ類が普及してきたこともあり、必ずしもオムツを外せばいいというわけでもなくなっているようだ。その辺は施設の方針で違って来る。いわゆる認知症の方は尿意や便意がわからなくなる場合もあるので、便秘がちになる。便秘は健康の大敵なので、トイレ誘導は大切な

介護行為である。

*介護と介助：介助とは一つ一つ具体的な行為を指し、介護とはそれらの介助を総合的に捉える用語である。例えば、食事介護ではなく食事介助と言う。また、介護は行政用語、法律用語に使用する抽象概念であり、介助とは具体的な行為を表す具象概念であるという区分も成り立つ。だから、介助保険ではなく介護保険と言う。であれば、技術的なことを言う時には介助技術と言うべきであろうが、教科書には介護技術となっていたりする。このへん学者先生もいいかげんなところがある。

介護の豆知識 その11：「弄便」

いわゆる認知症になると排泄に関していろいろな障害が出てくる。いくつか列挙すると、

- ① 尿意・便意がなくなるので排泄する必要性がわからない。
- ② トイレの場所がわからなくなる。
- ③ トイレ以外の場所で排泄してしまう。
- ④ トイレでの一連の動作がわかなくなってしまう。
- ⑤ 弄便（便を壁になすりつけたり、粘土遊びのようにしたりする）

最後の弄便はもう「人間の尊厳」*を疑いたくなる行為に見える。でも、ご本人は好んでそのような行為をしているわけではないだろう。嫌なものが自分の体についているので、それを取ろうとしているのかもしれない。しかし、こんな場合介護士はどう対処したらいいのだろうか。少なくとも、叱って済む問題ではない。それでは、同じことが繰り返されるのをただ見過ごせばいいのだろうか。

ただ、弄便は通常かなり重症になってから起きる現象であるが、今回はストーリーの都合上早い段階で取り入れている。

*「人間の尊厳」：介護の教科書に必ず出てくる最重要概念である。額面通りで解釈すれば、「人間を厳かに尊重せよ」ということなのであろうが、あまりにも言葉が重々しい。つっこんで言えば、なぜ「人間」をわざわざ取り上げる必要があるのか。「人間」というのは「その他の動物や生物」、「物」あるいは「神」と比較する場合に用いる近代的概念なのであろうが、老人問題でなぜそれらのものと比較する必要があるのか私にはわからない。「人間」ってそんなに偉い存在なのであろうか。もし言うのであれば、「人格の尊重」で十分ではないだろうか。例えば、弄便をする老人を見て、その行為があまりにも人間のすることではないから「人間の尊厳」がないと考えるのではなく、その行為でその老人の人格が崩壊しているように見えるから、何とかその老人の「人格の尊重」のためにはどうすればいいかを考える、というのが穏当ではないだろうか。ま、どちらも言葉のお遊びと言ってしまえばそうなのだが・・・。

第6話 ～お風呂は嫌い～

場所：さくらホーム 風呂場

時間：第5話トイレ騒動の直後

物語：サダはトイレで弄便をしてしまったのですぐに入浴する必要がある。クマーリはサダをトイレから風呂場の脱衣場まで何とか誘導してきたがここからが大変である。

ク：「サダさん、トイレの後はお風呂に入りましょうね。」

サ：「私は風呂が嫌いです。入りたくありません。」

く：「でも、サダさん。もう1か月もお風呂に入っていないですよ。」

クマーリはサダの服を脱がせようとするが、サダは強く拒否する。

サ：「あなた、何をやるのよ！手が痛いわ！」

ク：「すみません、サダさん。でもお風呂は気持ちがいいですよ。」

このやり取りを何度も繰り返すが、やはりサダは頑固としてお風呂に入ろうとはしない。

そこへ先輩介護士の森がやってくる。自分の服を脱ぎながら、

森：「サダさん、私は風呂に入るのが好きです。一緒にお風呂に入りましょう！」

私の背中を流して下さいね。」

サダは不意を突かれたように立ちすくんでいたが、森が優しくサダの服を脱がせていく。サダは不思議にも森のなすがままにしている。そして森はサダの手を取って風呂場に入っていく。森の顔には「やはり、ガイジンさんには無理ね。」と書いてある。

風呂の中では、森がサダの背中を流している。

森：「サダさん、気持ちいいですか。」

サ：「はい、とっても気持ちがいいです。」

クマーリは自信がなくなり、脱衣場で呆然と立ちすくんでいた。心の中では

「わたし、このまま介護の仕事が続けることができるかな？」と思い始めていた。

介護の豆知識 その12：「入浴拒否」

日本人は世界でも有数の風呂好きである。ところが、いわゆる認知症の方は入浴を拒否するケースが多いので不思議である。理由としては、入浴が面倒だったり、裸になるのが怖かったり、入る必要がないと考えていたり、例外的にはもともと風呂が嫌いな人もいるかもしれない。或いは自分で服を脱ぐことが困難なため介助が必要なため、他人に依存することをいやがっているのかもしれない。施設では大体週2回入浴するのが基本だが、この入浴介助は本当に骨の折れる仕事である。素直に応じてくれる場合が稀なので、毎回手の込んだ演技をする必要が出てくる。今回の場面はいわゆる「裸の付き合い」の典型例だが、老人の自己効能感（自分が他人の役に立つ喜び）に訴える作戦でもある。でも、実際介護士が利用者と一緒のお風呂に入る施設は果たしてどれほどあるだろうか。

第7話 ～財布は盗んでいません～

場所：さくらホーム サダの個室

時間：第6話から数日後

物語：サダは自分の部屋で何やら物を探しているようだ。

サ：「財布がないわ！財布がないわ！」

サダの部屋の前を通りかかったクマーリがサダの声を聞きつけて部屋の中に入る。

ク：「サダさん、どうしましたか、あわてないでください。」

サ：「あなた、私の財布、盗んだでしょう！すぐに返して！」

ク：「わたし、サダさんの財布盗んでいません！信じてください。」

それでもサダはクマーリを信じる事が出来なくて、クマーリに殴りかかる。そのはずみでクマーリは床に倒れてします。バタンという大きな音がした。

その音を聞いて、先輩介護士の森が駆け付ける。

森：「サダさん、どうしましたか？」

サ：「森さん、この人が私の財布を盗んだ！悪い人です。」

森：「サダさん、一緒に財布を探しましょう。どんな財布ですか。」

サ：頭を抱えて「青くて小さい財布。それだけ。」

森は引きだしの中を捜して財布を見つけたが、

森：「サダさん、引き出しの中は捜して見ましたか。」と言い、サダを引き出しまで誘導。

サ：「あ！引き出しの中にありました。でも、誰がこんなところにしまったの？」

サダはクマーリを睨みつけたので、まだ彼女を疑っているようだ。

森：「それはよかったですね。」心の中では「やっぱり、ガイジンさんには無理ね。」

クマーリは本当に自信がなくなってきた。

介護豆知識 その13：「物盗られ妄想」

いわゆる認知症の方に限らず人には被害妄想が起きる場合がある。自分が被害者になっていると一方的に思い込むのだ。悪いのは自分ではなく相手の方だと思い込む。なぜなのか。簡単に言えば、人は自分が可愛いわけだからだが、精神分析では自己防衛という考えがある。人は相手に対して加害者になっているという負い目があると、そのままでは自己を防衛できなくなる。それを防ぐためには、逆に自分が被害者で相手を加害者にすればいい。すなわち、加害者と被害者とを置換するわけである。

いわゆる認知症の場合は、いつも介護されているという負い目がある。すなわち、介護する人に対して自分が加害者になっているという気持ちである。でもそのままでは自己を防衛できないから、たまに相手を加害者にしてしまうのだ。だから、相手が自分の財布を盗んだと言い張るのである。相手が悪者であれば自分は善人となる。だから自己を防衛できるのである。妄想の相手は主に介護をする人の場合が多い。嫁だったり介護士だったり。

第8話 ～誕生日って何？～

場所：さくらホーム デイルーム

時期：その年の夏 ある日の午前

物語：今日は毎月恒例の誕生日会。今月誕生日を迎えるのはサダと井口たけしの二人。

二人はデイルームの同じテーブルに来ている。周りにはクマーリ、先輩介護士の森、生活指導員の上田がいる。

上：「サダさんとたけしさん、お誕生日おめでとうございます！！」職員全員が書いたお祝いの色紙を二人に手渡す。二人は嬉しそうに受け取る。

上：「それでは、歌を歌ってからケーキを食べましょう。」皆で歌い、ケーキを食べる。しばらくして、

森：「サダさん、誕生日はいつですか。今年で何歳ですか？」

サ：「覚えていません。何歳かもわかりません。」すると、たけしがサダを馬鹿にしたように、

た：「自分の誕生日もわからないのか。俺は昭和10年8月15日生れ。この日は終戦の日だ。」

た：「家族みんなで土下座してラジオを聞いたよ。」

今日は珍しく上機嫌なたけしだが、一方サダの方は急に元気がなくなった。そこでクマーリは親切にサダに教えようとして、ポケットからメモを取り出し、

ク：「サダさんのお誕生日は昭和3年8月3日ですよ。今年で86才です。」

ところが、サダは突然立ち上がり、

サ：「何歳でもいいでしょう！なぜ、みんなで私をいじめるの！」サダの顔は赤くなり、体が震えてきた。そばにいた森が異変に気付き、すぐにサダの体を抱えながら、「ガイジンさんは人の心が読めない」と思っている。そして、サダはクマーリの顔を睨んでいる。クマーリは心の中で、

「どうして私だけがサダさんに嫌われるの？」と悲しい気持ちになった。

介護の豆知識 その14：「Reality Orientation」の功罪

いわゆる認知症の方は時間・場所・人物の認識が出来なくなる。だから、施設では曜日、場所を覚えやすいようにいろいろ工夫する。例えば、曜日を大きく書いた張紙を作ったり、トイレの場所への案内表示を目立つようにしたりする。或いは、毎日利用者に曜日や時間を確認させたりもする。ところが、利用者は毎日曜日を聞かれるので面倒に感じたり、或いは正確に答えられない自分自身を情けなく感じてしまうことがある。だから、本人に良かれと思ってする行為がかえって本人の自信を喪失させることにつながる危険性があることをしっかりと認識すべきだ。

自分の誕生日を覚えていなくても、今日が何曜日だかわからなくても、人はちゃんと生きていける。老人独自の世界を無理に混乱させなくてもいいのではないだろうか。

第9話 ～家族は冷たい～

場所：さくらホーム サダの個室

時間：第8話の日の午後

物語：この日はサダの誕生日会でかつ日曜日だったので、サダの息子夫婦と孫がサダを久し振りに訪ねてきた。サダはベッドの中。

ク：「サダさん、ご家族がいらっしゃいました。」

一郎：面と向かって「お母さん、久し振り。どう、元気？」サダは少し頷く。

由美子：お辞儀をしながら「お母さん、86才のお誕生日おめでとうございます。」でも、サダはキョトンとしている。

サ：「一郎、こちらはどなた？」由美子は少し驚いたが、

由美子：「嫁の由美子です。久し振りに会えて嬉しいです。」

サダは由美子を見つめて、そばにいるあみを見て、

サ：「あなたは――、えーと――。」なかなか名前が出てこない。

あみ：照れくさそうに「おばあちゃん、あみです。」

S：「あ～、孫のあみちゃんね！大きくなったわ。いくつになったの。」

あみ：「今年で11才、小学校5年生だよ。」

あみはサダに誕生日プレゼントを手渡すと、サダは涙が出てくるほど嬉しくなった。

しばらく幸せな時間が過ぎて行った。そして息子家族が帰る時間がやってくる。

一郎：「お母さん、これから由美子の実家に行くんだ。また来るね。」

あみ：「おばあちゃん、元気でね。また会いに来るね。」

三人は部屋から出ていこうとしたその時、突然サダはベッドから降り、一郎の腕を掴んで、

サ：「一郎！私も帰る。お願い、一緒に連れて行っておくれ！！」

一郎はそんな母を不憫に思いながらも、どうしても母と一緒に暮らせないことを思うと、本当に憂鬱になるのであった。妻の由美子はあみを連れて一足先に部屋の外へ出ている。クマーリは「どうして息子なのに母と一緒に暮さないの？」と一郎夫婦を悪く思うと同時に、本当にサダは孤独で可哀想だと同情するのであった。

介護の豆知識 その15：「家族関係」

いわゆる認知症の方は病気が進行すると見当識障害が出てくる。時系列的には時間、場所そして人が判らなくなってくる。今回の場合もサダは嫁が誰だか判らなくなっているようだ。でも、全員が判らなくなるのではなく、一部の人に対してのみ障害が起きるのはなぜだろうか。その対象者との特別な人間関係が反映しているのであろうか。ひょっとしてサダは嫁のことが判らないふりをしているだけなのかもしれない。嫁姑の関係悪化の為施設に入らざるを得ないことをサダは知っているからだろうか。介護士はなかなか家族の關係に立ち入ることは難しいが、でも何も知らない、しないでは済まされない問題ではある。

第10話 ～無理な仕事～

場所：さくらホーム 会議室

時間：第9話から数日後

物語：8月後半に行われるホーム盆踊り大会準備のため関係者が集まって打ち合わせを行う。参加者は施設長の大坪、生活指導員の上田、先輩介護士の森そしてクマーリ。

大：「皆さん、今年も盆踊り大会を行います。ホームの皆さんが楽しめるようにがんばりましょう。協力をお願いします。でも予算を忘れないで下さい。」他の参加者はしかめ面をする。

上：「それでは、大会の資料を配ります。内容はだいたい去年と同じです。」

上：「認知症フロアの責任者は森さんですが、アシスタントはクマーリさんをお願いします。よろしいですか。」

ク：「はい、わかりました。がんばります。」でも、心の中では不安が一杯。

打ち合わせは約30分で終了した。

大：「みなさんお疲れ様でした。よろしくお願いします。」皆：「はい、わかりました。」

森：「では、クマーリさん。今日の打ち合わせの報告書を書いておいてください。」

これを聞いてクマーリはとても驚いた。心の中では「なぜ外国人の私に？これはいじめだ！」と思った。

森：「できるでしょう？」

ク：「書いたことはありません・・・でもがんばります。いつまでに出せばいいですか？」

森：「明日までお願いね。」

クマーリは会議室を出た時泣きそうだった。今は何とか日本語は話せるようになったが、書くのは全然自信がない。そんなことは森だって分かっているはずだ！と怒りすら覚えてきた。その時たまたまサダが通りかった。

ク：「サダさん、こんにちは。お元気ですか。」

サダはクマーリが泣いているのを見逃さなかった。

介護の豆知識 その16：「外国人介護士の仕事」

外国人特に非漢字圏出身者は日本語の読み書きはとても苦手だ。漢字の習得は日本人の想像以上に困難である。でも、どうも外国人を雇用する側はそのことに無頓着のようだ。共感力が不足しているとしか思えない。なぜ外国人に無理に読み書きを強制するのか。

外国人介護士の日本語能力を向上させることばかり考えないで、外国人介護士に任せる仕事の範囲を現実的に考える必要があるのではないか。また、彼等の負担を出来る限り少なくするため、ハイテク機器を導入してはどうだろうか。例えば、外国語で録音すれば同時に日本語に翻訳され、印刷が可能な機器等。スマートフォンでも可能だという新聞記事もある。翻訳された不完全な文章は日本人管理者がチェックすれば済む話だ。

第11話 ～仕事辞めます～

場所：さくらホーム ホール

時間：第10話の翌日

物語：盆踊り会場であるホールでスタッフが会場設営などの準備を行っている。クマーリも参加している。生活指導員の上田が総責任者である。

上：「みんな、盆踊り大会は3日後だから急いで下さい！」そこへ先輩介護士の森がやって来た。

森：「クマーリさん、昨日頼んだ報告書はできましたか？」

ク：「はい、森さん。これです。」と言って報告書を森に見せる。

森：報告書を見ながら「間違いが多過ぎます。書き直して下さい。」

ク：「え、でもどうすればいいかわかりません。」もう泣き顔になっている。

森：「じゃ、書かなくてもいいです。私が書きますから。」と言ってその場を離れる。クマーリはしばらくそこに立っていたが、突然走りだして行った。周りのみんなが驚いている。生活指導員の上田が心配して後をついていく。クマーリはロッカー室にいて、大泣きしながら着替えをしていた。

ク：「上田さん、私仕事辞めます。これまでどうもありがとうございました。」

上：「報告書のことでしょう？誰でも最初は間違えます。大丈夫ですよ。」

ク：「もういやなんです！みんな、それにサダさんも私を嫌っているから。」

上：「そんなことはないですよ。それは考えすぎです。」

ロッカー室の外ではサダが二人の会話を聞いていた。

介護の豆知識 その17：「施設の行事」

介護施設では年間行事がいくつもある。花見、七夕、盆踊り大会等の季節行事や施設毎の特別行事。また、外部からのボランティア活動も数多い。これらの行事の準備は通常業務の合間を縫って行うことになるので、介護士は大変忙しい。時には、お祭りのような行事で介護士などが自ら演技をすることもある。素人エンターテイナーである。

エンターテイナーと言えば、老人ホームとは違いデイサービスセンターではほぼ毎日行事があると言ってもいい。介護士はまさしくエンターテイナーでなければ務まらない。

第12話 ～踊らにや損々～

場所：さくらホーム ホール

時間：第11話から3日後 午前

物語：いよいよ盆踊り大会当日である。スタッフ一同はホームオリジナルの法被を着ている。利用者は階毎に順番を決めて参加する。外部からの来賓やボランティアも数多く参加している。簡単な食べ物コーナー、ゲームコーナー、お店もある。年間行事の中では一番大きな行事であり、スタッフは皆多少緊張気味である。

クマーリは3日前に一度は仕事を辞めると言ってはみたが、生活指導員の上田になだめられて辞めるのは思いとどまった。今日も仕事に来ている。でも、まったく元気がない。今日は井口たけしの付き添いをしている。

た：「盆踊りかあ。全然面白くない。酒が飲みたい。酒持ってきて！」

ク：「たけしさん、お酒は体に悪いです。お医者さんに止められていますよ。」

そのうちに音楽が流れてきた。「東京音頭」だ。

ハア 踊り踊るなら チョイト 東京音頭 ヨイヨイ 花の都の 花の都の真ん中で サテ ヤットナ ソレ ヨイヨイヨイ ヤットナ ソレ ヨイヨイヨイ
クマーリには何の歌かまったくわからない。でも、利用者が楽しんでいるのを見て嬉しくなった。

すると、驚いたことにサダが皆と一緒に踊っているのではないか。クマーリもサダが踊っているのに気付いた。でも、今日はサダに声掛けようという気が起きない。

サダを避けようとして、たけしを他の場所に誘導しようとする。

ところが、サダがクマーリの所に近づいてきて、「一緒に踊ろう」と手招きしている。クマーリはなぜサダと一緒に踊ろうとしているのかわからなかった。でも、何か不思議な気持ちになり、「サダの言ったとおりにしよう。」と決めた。

そこへ先輩介護士の森が通りかかったので、

ク：「森さん、私踊りたいので、たけしさんをお願いします。」クマーリは森の返事も聞かずにサダの方へ歩み寄り、一緒に踊りだした。森はただ啞然と見ている。

ハア 西に富士の嶺 チョイト 東に筑波 ヨイヨイ 音頭とる子は 音頭とる子は真ん中に サテ ヤットナ ソレ ヨイヨイヨイ ヤットナ ソレ ヨイヨイヨイ

サダとクマーリの二人は一心不乱に踊り続けた。クマーリはサダの後についてサダの踊りをまねているだけなので、サダの顔は見えない。しかし、サダの後ろ姿がとても優しいと思った。

一方サダは自分の後をクマーリが素直について来ているのがわかり、安心と同時に嬉しい気持ちがしていた。

二人の顔はどちらも仮面を剥いだ自然なままの清々しい顔であった。

介護の豆知識 その18：「受容と共感」

介護では受容と共感が大切だと言われる。受容とは相手を受け入れることで、共感とは受け入れたものを肯定することだと思うが、両者とも同じような意味であろう。だから、ここでは共感に絞って話を進めていくことにする。

ではあらためて、一体共感とは何か。同感や同情とはどう違うのか。英語では同情が sympathy で共感が empathy とか compassion とか言うらしい。ある人は同情が見下すような感じで良くないから共感すべきだという。共感是对等な立場で相手の気持ちを察することだからという理由で。でも、「共」という漢字はあくまでお互いが独立しているのが前提だから（共同、共立という漢字を参照）、ちょっとよそよそしい感じがする。よく「寄り添って」という表現が用いられるが、これもあくまでも「共」と同じで、相手とは決して一体にはならないぞ、というニュアンスがする。私はいわゆる認知症の方とのコミュニケーションでは、「共」或いは「寄り添い」ではなく、思い切って相手の心の中に入っていきることが必要なのではないかと考えている。それはある意味で相手と同一化することである。あるいは、相手の世界に入っていくことである。でもこれは「同情」とは違う。「融合」「包摂」の方が近いかな。もちろん、ずっと同一化しているわけではなく、ある人は「片足だけを相手の世界に入れる」と表現する。

今回の場面は、最後にサダとクマーリがお互いに共感を抱いているような感じだ。サダは他のスタッフからいじめられて仕事を辞めたいと思っているクマーリに共感している。だから、クマーリを踊りに誘った。踊って嫌な事は忘れなさいと優しく教えているようにも思える。

一方クマーリの方は、サダが家族から見放されて孤独であることに共感している。最初は可哀想だと思って同情していたが、この場面では、クマーリはサダが踊ることによって何かを表現しているのではないかと直観している。

これらサダとクマーリの心の交流は無意識的に行われている。無意識と無意識との交流だ。これがコミュニケーションの醍醐味なのではないだろうか。

などなど難しいことを書いてきたが、とにかく介護には心の深奥を探索する面白みがある。そのために介護士は心理学を大いに学ぶ必要がある。

介護の豆知識 その19：「仮面」

人は誰でも仮面を付けている。介護士の仮面、利用者の仮面、親の仮面、子の仮面、社長の仮面、先生の仮面、学生の仮面等々。人は仮面を付けていないと生きていけない。でも、何十年と同じ仮面を付けているとその仮面が受肉化してしまう。仮面か素顔かがわからなくなってしまう。でも、仮面を外す時が必ずある。そんな時人は一番生甲斐を感じるのかもしれない。ユング心理学では仮面のことをペルソナと呼んでいる。Personality の語源だ。介護士も自分がどんな仮面を付けているかをしっかりと自覚する必要があるだろう。

第13話 ～女の人生～

場所：さくらホーム デイルーム

時間：1年後の秋 ある日の午後

物語：今日は認知症フロアでは書道教室が開かれる。ボランティアの先生が来て希望者を募って行われる。参加者はサダと別の女性利用者馬淵よしの（心臓病）。スタッフは先輩介護士の森とクマーリ。

先生：「ではみなさん、今日も楽しく字を書きましょうね。」皆頷く。

森：よしのの隣に座って「よしのさんは、何を書きますか？」

よ：「そうね、何がいいかしら。迷いますね。」

ク：サダの隣に座って「サダさんは、何を書きますか？」

サ：「そうね、私は“女の人生”と書くつもりです。」

ク：「そうですか、それはいいですね。楽しみです。」

先生：「ではみなさん、始めてください。上手に書けなくても大丈夫です。ゆっくり書いてください。」

サダとよしのは嬉しそうに書いていく。でも、もちろん、字はそんなにうまくは書けない。

先生：「みなさん、上手く書けない時はもう一度書き直しましょう。」

クマーリは漢字が苦手なので、サダの下手な習字を見ても感心してしまう。

サ：クマーリに向かって「あなたも書いたらどう？」クマーリは、あたかも「どっちがうまいか競争ね。」と言っているように思えた。クマーリはそれが嬉しくて書いてみた。同じく“女の人生”。でも全く下手くそな字。

先生：「クマーリさん、もっと練習したら上手になれますよ。」

サ：あたかも「私の勝ちね。」と思っているのか、「ははは、お上手ね。これは罰。」と言ってクマーリの顔に墨を塗り付けた。

ク：たいそう嬉しいが「あ～、サダさん、何をやるんですか？」

そばにいた皆が大笑いをした。

介護豆知識 その20：「レクリエーション」（通称レク）1

施設では大体毎日レクの時間がある。メニューは毎日違う。目的は気分転換、運動機能の向上、仲間意識の醸成などなど。それこそ無数の活動があるが、日本伝統文化である書道も定番の一つ。特に女性の間には人気がある。作品を展示することもできるので本人の自尊心をくすぐることもできる。ただ、墨を使うので場所が汚れる難点がある。

レクの問題は参加したがる利用者があること。もちろん、参加を強制することは不可能だし、やるべきでもないが、と言って、本人のやる気のなさに任せていつも不参加でいいとも言えない。そこをどうやって参加につなげていくかが介護士の腕の見せ所である。

第14話 ～風船バレー～

場所：さくらホーム デイルーム

時間：第13話から数日後 午後

物語：今日はレクリエーション活動として風船バレーが行われる。参加者はサダ・たけし組と別の女性利用者馬淵よしの、男性利用者河島大吉（統合失調症）組の4人。他、クマーリ、森、PTの中島健がいる。実行責任者は森。今日の風船バレーはテーブルを2台くっつけて両側にそれぞれ二人ずつ座って、バレーボールのように1個の風船を相手の方に送り出す単純なもの。

中：「まずは腕の体操から始めます。一・二・三・四で腕を上にあげて、五・六・七・八で下ろします。」皆でそのように体操する。サダも嬉しそうにしている。

森：「次に大きく息を吸って吐きながら風船をふくらませます。」風船がふくらむ。

森：「はい、それではみなさん風船を相手の方に飛ばして下さい。」風船が飛ぶ。

ゲームが始まった。珍しく、今日はたけしも楽しそうに参加している。たけしは左半身マヒなので右手だけを使っている。風船がクマーリの所に飛んできたので、

ク：「そ～れ、サダさんの番ですよ！」サダは受け取った風船を相手に返すがうまくいかない。

大：「風船をよく見るとうまくいきますよ。」

何回か風船がお互い行ったり来たりしたが、突然大吉が風船に噛みついた。“バ～ン”。と風船が破裂する。

た：「おまえ、危ないだろう！」が、大吉はぼかんとしたまま。

サ：「これは面白い！わたしもしたいわ。」と言って風船に噛みつく。“バ～ン”すると、たけしもよしのも真似をして”バ～ン””バ～ン”。

森：困った様子で「風船を破ってしまいましたか・・・では、これで風船バレーは終わりにします。」大吉がどうして風船に噛みついたのかはわからない。何かの食べ物と勘違いしたのだろうか。

大島：「最後にもう一度腕の体操をします。」皆前と同じ体操をする。

クマーリも何が起こったのかよくわからない風船バレーであった。

介護豆知識 その21：「レクリエーション」（通称レク）2

数多くのレクの中では風船バレーも定番である。簡単にできるし、特別な道具も不要だ。風船も安い。かつて日本のバレーボールがオリンピックで金メダルを取ったことも影響しているのだろうか。

なお、今回の場面で大吉が風船に噛みついたのは、特に意味はない。そういうこともあるかなと想像しただけ。そのような行為を実際に見たわけではない。

第15話 ～エッチなフラダンス～

場所：さくらホーム デイルーム

時間：第14話から数日後 午後

物語：今日はフラダンス教室。婦人会ボランティアのフラダンス同好会がホームに来る。

利用者はイスに座りながら見て楽しむことになる。サダ、たけしを始め大方の利用者が参加している。スタッフからは生活指導員の上田、先輩介護士の森、クマーリが参加している。

上：「今日は待ちに待ったフラダンスの日です。みなさん大いに楽しみましょう！」

10人のフラダンスチームが一斉に登場して音楽に合わせて踊りだす。衣装も本場ハワイのそれとほとんど同じだ。腰の布とレイが常夏のハワイを想像させる。

観衆の利用者も体をそれなりに揺らしたり、手を上げたりして楽しんでいる。

森：「みなさん、一緒に踊りたい方は前に出てきていただけませんか。」

でも遠慮してか誰も前には出てこない。

ク：「サダさん、どうですか。私と一緒に踊りませんか？」

サ：「だめだよ、動きが早いし疲れるよ。」でも、クマーリがサダの腕を優しく抱えると、サダは抵抗なく前に出ていき、クマーリと一緒にフラダンスを踊りだす。ボランティアが布とレイを持ってくる。

ク：「サダさん、とても上手です。驚きました。」

サ：「そうかい。うれしいね。あなたも上手いよ。」

ク：「ほめていただいてうれしいです。」

今度は驚いたことにたけしが車いすのまま前に出て踊りだす。

た：「これは楽しいね。美人も多いし。」と言って、若いご婦人のお尻をバチッと叩く。これには一同大笑い。

上：「やっぱり、たけしさんは女性が目的だったのね。」

介護豆知識 その22：「レクリエーション」（通称レク）3

施設では年に何度か外部からボランティアを招いて大掛かりなレクリエーションを行う。

今回の様なフラダンスの他、太鼓演奏、合唱隊、手品師、ペット等々。これらのレクそのものを楽しむ目的と同時に、外部の人との接触をして、外部の社会とのつながりを意識させるのも有意義である。平素はとかくホーム内での人間関係に終始するので、そこからくる息苦しさを開放することが期待できる。

課題は施設の予算が限られているので、人気のあるボランティア団体を定期的に確保することであろう。

第16話 ～イモ娘と富士山～

場所：ホームの近くにあるさくら市民農園

時間：第15話から数日後 午後

物語：今日は農園で行われる秋の収穫祭へ出掛ける。小さなワゴン車に数人の利用者と森及びクマーリが同乗。天気も秋晴れで気持ちがいい。

森：車中「みなさん、今日は天気もよくて外出には最高ですね。」

た：「ところでどこへ行くんだい？」

ク：「今日は近くの農園に行きます。イモを掘ります。」

た：「あ、そう言えばお前は“イモ娘”だったね。ははは！」

でもクマーリはなんの意味かわからなかったもので、怪訝な顔をしている。

そうこうしているうちに、車は農園に着いた。農園の管理者が挨拶をする。

管理者：「さくらホームのみなさん、ようこそ。大歓迎いたします。」

森：「あ、皆さん、ご覧ください、向こうに富士山が見えますよ。」みんな、そっちを見る。

ク：「わ～あ、とっても美しい山。」

サ：「あなたの国の山もこんなのかい？」

ク：嬉しくなって「い～え、形は違います。でもこれと同じぐらい美しいです。」

みんな、畑の方に向かい、森やクマーリの手助けを受けながらイモを掘る。

森：「サダさん、楽しそうですね。」

サ：「久しぶりに外で体を動かすと気持ちがいいね。」

ク：「そうですね、きれいな空気を吸うと体が喜びます。」

畑の横には花壇があって、そこには菊、コスモス、なでしこ等の花が咲いていた。

ク：「サダさん、あそこの花もきれいですね。」

サ：嬉しそうに「そうだね、私は花が大好きでね。」

た：「酒があったらもっと楽しかったのに。」

介護の豆知識 その23：「外出行事」

施設では年に何回か外出行事がある。桜見物、農園作業、紅葉狩りなどの自然との触れ合いの他、スーパーへの買物、祭見物などもある。大方の利用者は滅多にない外出を楽しむ。

特に、普段出来ない自然との触れ合いは大変有意義である。ただ、車いすの方も多いため同行スタッフも多くなり施設の負担は重い。また、大型車両の確保や外出先でのケガや事故の心配もあるので、そう簡単に出来るものではないのが実情。

第17話 ～どっちが美人～

場所：ホーム お風呂場のそばの化粧室

時間：第16話から数日後 午後

物語：今日は美容の日。とある美容専門学校の学生さん達がホームに来て、女性利用者に美容サービスを提供してくれる。女性利用者にはとっても嬉しい日だ。希望者が多いので時間を区切ってサービスを受ける。この時間はサダとよしのが来ている。美容は医学とも関係が深いので看護師の吉田も来ている。

吉：「みなさん、世界一の美人を目指してお化粧を楽しんでください。」

学生1：「それでは始めましょうか。リラックスなさって。」学生はまずタオルで顔を拭く。その後メーキャップをしていく。サダは近くで立ちながら見学をしている。

ク：「サダさん、気持ちいいですか。」サダはにこっとする。次は口紅だ。

学生2：「次に口紅をお付けしたら完成です。どの色がよろしいですか？」

よしの：「薄いピンク色がいいね。」

サダ：「真っ赤な色がいいね。」学生が口紅を塗る。そして、最後はマッサージ。

クマーリはマッサージ器を見たことがないようで、

ク：「それは何ですか？」

学生1：「これは最新のマッサージ器です。疲れを取るのに最高です。」

いよいよ二人の化粧が無事終了したようだ。

学生1：「終わりました。鏡をご覧ください。気に入られたでしょうか。」

サ：よしのに向かって「やっぱり、私の方が美人だね。」

よ：サダに向かって「何よ、私のほうがずっと美人だわ。」

吉：「いやいや、お二人ともとっても美人ですよ。」「女優みたいです。」

クマーリはサダが心から化粧を楽しんでいるのを見て嬉しくなった。

介護の豆知識 その24：「女性と化粧」

施設の利用者は大体8割が女性だ。女性は80歳や90歳になっても女心は忘れない。それはいわゆる認知症になっても変わらないはずである。これはもう女性の本能なのだろう。たとえ、風呂に入りたがらなくても、いつも同じ服装をしていたって、やはり女性は化粧には憧れる。女性にとっては大きな生甲斐でもあるだろう。だから、施設ではたまに外部の美容師を呼んでサービスを提供することがある。これはとっても素晴らしいサービスである。

介護の豆知識 その25：「感性と理性」

いわゆる認知症になると感覚もそれなりに衰えるが、記憶力などの認知機能の衰えほどではない。であれば、利用者の感覚能力すなわち感性を最大限引き出すことが大切だ。であれば対応する介護士も同じだ。理性よりも感性のアンテナを強くすることが肝心だ。

第18話 ～仕事を任された～

場所：さくらホーム 会議室

時間：2年後の冬 ある日の午後

物語：サダが入居してすでに2年以上経った。今日は毎月2回行われるカンファレンスの日。生活指導員の上田、看護師の吉田、管理栄養士の相川、先輩介護士の森そしてクマーリが集まっている。サダのケースも取り上げられた。

上：「最近サダさんの様子はいかがですか。」

相：「食欲もあまりないし、体重も減っています。」

吉：「このところずっと便秘です。」

森：「最近、テレビをつけたまま寝ていることが多いです。」

上：「このままだったらADLが低下し、寝たきりになるかもしれません。」皆頷く。

森：「いろいろサダさんに声掛けをしているのですが、ぜんぜん反応がありません。」

上：「これでは今後のケアプランが作りにくいですね。QOLを上げる良いアイデアはありませんか。」

森：「サダさんと合うクマーリさんにアセスメントをしてもらったらどうですか。」

クマーリは「やっと認めてくれたのかな？」と思い嬉しくなった。

上：「それでは、クマーリさん、サダさんのことをお願いしてもいいですか。」

ク：びっくりしているが、「はい、わかりました。でも、できるかどうか心配です。」

森：「まず自分でできるか考えて、できないところがあれば相談してください。」

カンファレンスは終了し、クマーリは会議室を出るとすぐにサダの個室へ向かったが、思い直して職場に戻った。

介護の豆知識 その26：「カンファレンス」

会議を英語で **conference** と言うのでそのままカナで呼んでいる。すなわち「打ち合わせ」のこと。ビジネス界では **meeting** と言うのが通常だが、医学界では **conference** を使用しているようだ。単に「打ち合わせ」と言うより「カンファレンス」と言う方が恰好はいいが、中身の深さとは関係ない。

介護施設でも毎月定期的に関係者が集まって、複数の利用者さんのケースを取り上げて、現状把握と今後の方針を話し合う。仕切るのはケアマネージャー資格のある生活指導員。

通常下端の介護士は参加しないが、今回の場面では特別にクマーリが参加している。

カンファレンスではチームケアが重要視される。生活指導員、看護師、理学療法士、管理栄養士、介護士等がそれぞれの情報を報告し合う。情報を共有することによって介護の質を高めていくことが期待されている。

介護の豆知識 その27；「ADL」=Activity of Daily Living 日常生活動作

座る、立つ、歩く、食べる、話す、服を着るなど、日常的な生活動作のこと。

利用者のアセスメントにおける基本的な評価ポイントである。施設では各利用者のADL表を必ず作成する。

介護の豆知識 その28：「ケアプラン」と「アセスメント」

ケアプランとは介護計画と訳すが、すなわちどのようにケアをしていくかを計画することである。そして、アセスメントとはケアプランの入り口にあたり、利用者の情報収集をしてそれら进行评估することである。両語とも日本語訳ではなく英語のカタカナ表記をするのが一般的。施設では通常生活指導員がケアプランを作成するが、そのためのアセスメントは介護士が行う。

ケアプランは介護の肝であり、適切なケアプランを作成できるかどうか課題である。もちろん、ケアプランを作ればいいわけではなく、作ったプランをきちんと実行してそれが有効であるかを検証する作業も大切である。そして常により適切なプランに修正していくという循環作業となる。いわゆる、Plan→ Do→ See の繰り返しである。

介護の豆知識 その29：「QOL=Quality of Life」

生活の質と訳される。利用者がどんどん老化が進み、普段通りの生活が出来なくなった時、生活の質が下がったと判断される。だから、介護では下がった生活の質を上げようという目的でこのQOLの向上という言葉が使われる。でも、この言葉はかなり抽象的な表現であり、言葉に魂が入っていないとも言えるのではないだろうか。とにかく現代日本社会は英語の直輸入が盛ん。英語であればカッコいい！？

肝心なことは、Lifeの中身であろう。生命とも訳せるし、生活とも訳せる。その生命も生物学的な「生命」(せいめい)と心理学或いは宗教学的な「いのち」と両方解釈できる。これらを総合することを目標とした統合医学というものがあるが、実際問題そんなことは可能なのだろうか。

第19話 ～話せばわかる?～

場所：さくらホーム サダの個室

時間：第18話の翌日 午前

物語：クマーリは昨晚サダのことを一生懸命に考えた。でもなかなか良いアイデアは浮かんでこなかった。とにかくサダと会って話をしたいと思った。トントン。

ク：「サダさん、おはようございます。クマーリです。入ってもいいですか。」

サダはベッドで仰向けに寝ている。起きてはいるが、返事をしない。仕方ないのでクマーリは部屋に入る。

ク：「サダさん、天気がいいのに寝ていたらもったいないです。」

サ：突然起き上がって「ここはシバマタ あなたもシバマタ」と言う。

ク：「え、シバマタ?何のことですか?」

サ：「私はシバマタから来たところよ。」

クマーリは何のことかさっぱり理解できず、どう対応すべきかわからなかった。

するとサダはベッドから降りようとしたので、クマーリはサダの体を支える。

サダが窓の方を指さしたので、クマーリはゆっくりとサダを窓際に誘導する。

サ：窓の外を指さし「あれはシバマタという木よ。」

クマーリは窓の外を見たが、そこには中庭の木と隣の家が見えるだけだった。

ク：「サダさん、起きたばかりですが、デイルームに行きませんか。」

サ：「だめ!まだシバマタに会っていないんですから。」

クマーリはいよいよわけがわからなくなってしまった。しかたないので、今日はこれで退散することにした。

ク：「サダさん、それではシバマタさんに会えたら食事にしましょうね。」と言いながらサダをベッドに戻した。

介護の豆知識 その30：「利用者との会話」

施設で介護士が利用者との会話する時間はすごく限られている。介護士は身体介護で超忙しいため、なかなか時間を取って利用者との話す時間がない。話すことの大切さはもちろんわかっているのだがどうしようもないというのが実情だ。だから施設によっては外部の対話（または傾聴）ボランティアを呼んで話をしてもらったりしている。

この場面はサダのアセスメントを任されたクマーリがまず情報収集を始めた場面。情報収集ではとかく一方的に相手に質問をしようとするが、そうすると相手は何か警察の尋問にあったように感じることもあるから、要注意。

第20話 ～自分らしく生きる～

場所：さくらホーム サダの個室

時間：第19話の翌日 午後

物語：前日に続いてクマーリはサダとの会話を試みる。サダはベッドで半起き。

クマーリは前日先輩介護士の森から、シバマタとはサダの生れた柴又ではないかと聞いていた。

ク：「サダさん、森さんがシバマタは生れたところだと言っていたのですが？」

サ：首を振って「違う 違う シバマタは違う。」

ク：「え、ではシバマタとは何ですか？」

サ：「あ、シバマタが呼んでいる。それ！」と言って手を動かした。

ク：「サダさん、その手の意味は何ですか？」

サダはベッドから降りて、手と足を動かし始めた。危ないのでクマーリはサダの体を支える。サダの目は真剣そのもの。サダの体はだいぶ弱ってきているのだが、サダは必死に体を動かそうとする。

サ：「シバマタに動かされるの。」

クマーリはサダをイスに座らせて自分ももう一つのイスに腰掛けた。

ク：「サダさん、そのシバマタさんに会えば幸せですか？」

サ：「そう、シバマタに会えればもう死んでもいい。だからお願いだからシバマタに会わせておくれ。」

ク：「では、質問です。シバマタさんはどんな人ですか？」

サ：「そうね、シバマタは和服を着ているわ。とっても綺麗な和服を。」

サ：「それにシバマタは踊りと唄が好きだわ。」

ク：「わかりました。ではすぐにでもシバマタさんを探してみます。」

クマーリはサダをベッドに戻して退室する。

介護の豆知識 その31：「人生の養生」

クマーリはサダのことを一生懸命に考えたが、それはサダが「自分らしく生きる」ためにはどうしたらいいかを考えたことになる。私はこの「自分らしく生きる」ということが「人生の養生」だと考えている。養生と言え、江戸時代の儒学者貝原益軒の著した「養生訓」が有名だが、益軒は体と心の養生は述べているが、人生の養生とは言っていない。もちろん体と心の養生は大切だが、老年期に入ったら人生の総まとめとしての「人生の養生」が絶対必要だと考える。そして、これが肝心だが、老年期では「自分らしく生きる」とは「自分らしく死ぬ」ことにつながる。「生きる」と「死ぬ」は対立するのではなく、一体化している。この辺は死生学の出番です。みなさんも勉強しましょう。

介護の豆知識 その32：「幻視・幻聴」

いわゆる認知症の種類によっては幻視や幻聴が起こることがある。レビー小体型では幻視が起こり、統合失調症がらみとなると幻聴が起きるとも言われる。今回サダはアルツハイマー型認知症なので単なる幻覚ではなく、過去の記憶と深く関係があるものと推察される。このような幻覚が起きた場合の対応は、とにかく利用者の幻覚を否定しないで、それを受け入れることであろう。そして利用者の独自の世界に入り込むのがいい。

第21話 ～宝物探し～

場所：さくらホーム スタッフルーム

時間：第20話の翌日 深夜

物語：今日クマーリは夜勤である。夕方から翌日の朝までの勤務。重労働である。この日は先輩介護士の森と二人体制である。深夜利用者が寝静まってから二人は休憩中。

ク：「森さん、お疲れ様です。ちょっと伺いたいことがあるんですがよろしいですか。」

森：「はい、大丈夫です。どんなことですか？」

ク：「実はサダさんのことなんです。彼女と話しましたが、シバマタばかりで何もわかりません。」

森：「シバマタは生れた柴又ではなかったの？」

ク：「違うんです。シバマタは踊りと唄が好きな人のようなんです。」

森：「踊りと唄？う～む、あ、きっとそれはサダさん本人のことでしょう。」

ク：「え、どうしてですか？」

森：「それはね。サダさんは昔日本舞踊のお師匠さんだったの。」

ク：「そうなんですか。でもシバマタとは何なんでしょう。」

森：「それはきっと彼女の芸名だったのかもしれないね。」

ク：「芸名？」

森：「そう、踊りの仕事をするときに使う自分の名前よ。きっと柴又で生まれたから、それを芸名にしたんだわ。」

ク：「そうでしたか。これでよくわかりました。どうもありがとうございました。」

クマーリは何か宝物を探し当てたような顔をして休憩室に入った。少し仮眠を取るためである。

介護の豆知識 その33：「夜勤」

介護施設の夜勤は大体16時間連続勤務。夜勤明けの日と翌日は休めるが、介護士は平均月に4～5回程度夜勤をする場合が多い。休暇明けは日勤で昼の仕事。だから、毎週昼と夜の仕事を交互に行わなければならない。これは身体に大きな負担をもたらす。バイオリズムが狂ってもおかしくはない。特に女性には大敵だ。だから、中には夜勤専門の介護士もいる。これならしんどくてもずっと夜勤なのでバイオリズムは維持できる。

夜勤は介護施設に限らず病院、警察、コンビニ等々現代文明には必須である。でも、そこで働く人は本当に大変だ。いくら夜勤手当が付いてもできればやりたくないのが本音。

介護の豆知識 その34：「宝物」

アセスメントをする場合、利用者の「課題」ばかり追求することが多い。課題とは解決すべき問題だから利用者の悪い面ばかり見ることになる。でも、それはあまりにも一方的である。逆に良い面というか前向きな見方が必要である。それはあたかも利用者の「宝物」を探すような作業である。そう考えればアセスメントも楽しい作業となる。

第22話 ～本当の願い～

場所：さくらホーム 会議室

時間：第21話の数日後

物語：今日は月2回のカンファランス。サダのケースが主な課題。参加者は生活指導員の上田、看護師の吉田、管理栄養士の相川、PTの中島、先輩介護士の森そしてクマーリ。

上：「クマーリさん、サダさんのアセスメントはうまくいきましたか。」

ク：「はい、最初はよくわからなかったのですが、・・・」言い終わらないうちに、

吉：「体がかなり弱くなっているから安静にしたほうがいいと思います。」

中：「自立のためには、安静よりもリハビリをしたほうがいいと思います。」

相：「元気を取り戻すためには栄養のある物をたくさん食べたほうがいいと思います。」

森：「ご家族にもっと来て頂くようお願いしてみたらいかがでしょうか。」

上：「いろいろアイデアはあるようですね。でも介護で一番大切なのは、客観的で科学的なケアですね。」

みんな議論し始めるが、クマーリは無視されたことに納得がいかず、思い切って発言する。

ク：「私の考えはみなさんとは違います。一番大切なのは、サダさんが心から願っていることです。」

上：「それはどんなことですか？」

ク：少し躊躇したが「それは、その～、日本舞踊です。」みんな驚く。

ク：「サダさんは日本舞踊のお師匠さんでした。死ぬ前にもう一度その踊りを見せたいと願っているはずです。」

みんな：「それは危険だ、無理だ、止めたほうがいい。」と反対したが、結局、

上：「それではサダさんの件はクマーリさんに任せましょう。」

クマーリはそれを聞いて嬉しかったが反面、出来るのかどうか不安であった。

介護の豆知識 その35：「自立と自律」

介護の目的は「自立支援」だと教科書には書いてあるが、では「自立」とは一体どのような状態のことなのだろうか。英語では **independence**。常識的には「自立」とは他者に依存しないということであろうが、果たして人は他者に依存しないで生きることは可能なのだろうか。健康者であってもある程度は他者に依存しているのではないだろうか。あるいは、やはり依存はよくないことで、代わりに人は他者とつながりを持つべきだということだろうか。

この「自立」概念には西洋哲学の臭いがぶんぶんする。であれば非西洋の日本人にはこの「自立」概念は相応しいのであろうか。

教科書に書いてあるものをただ鵜呑みにするのではなくて、自分で考えることが必要だ。そして、「自立」とは別に「自律」という言葉がある。英語では **autonomy**。これは「自分を自由に律する」こと。医学では「自律神経」という言い方がある。ではこの「自律」も西洋哲学の落し子なのだろうか。う～む、よくわからない！

結論としては、利用者は他者とのつながりを持ちながらも、他者に依存しないで、すなわち「自立」して、自分らしさを発揮する、すなわち「自律」した生活を送れるよう介護者は支援をすべきだ、ということなのだろうか。ちょっと平凡かな？

介護の豆知識 その36：「客観性と科学性」

介護の教科書には介護は客観的かつ科学的であるべきだと堂々と描かれてある。果たしてそうであろうか。客観的であれと言うのは、主観的であってはいけないという意味であろう。科学的であれと言うのは、根拠のない盲信的な行為は慎めということであろう。だが、介護においてそんなことは現実的なことだろうか。利用者も介護士も生身の人間だ。それぞれ主観で生きている。その主観と主観の触れ合いが介護行為であろう。哲学ではこれを間主観性と呼ぶらしい。人間という漢字も人と人の間だ。私は、介護は間主観性に基づく芸術的行為だと考えている。利用者と介護士のこころ・魂が交流し合いながら、その体験そのものを愉しむ行為が芸術行為でなくて何だろう。もちろん、科学に基づく医学・看護知識も必要なのは当然ではあるが。

第23話 ～初めて褒められた～

場所：さくらホーム サダの個室と事務所

時間：第22話の翌日

物語：クマーリはカンファレンスの結果を受けて、早速サダと相談した。

ク：「サダさん、お望みの踊りができますよ。」

サ：「お～、シバマタと会えるのかい？」

ク：「はい、そうです。12月末デイルームで舞踊会を開きます。」

サダはクマーリの話が理解できたのかはわからないが、嬉しそうだった。

ク：「ですから、しっかりと踊れるように準備しましょう。」

まずは体力の回復。PTの中島に協力してもらった。

中：「まずは足腰が強くなるように、毎日30分歩いてください。」

サダは中島の言う通りに毎日30分廊下または中庭をクマーリと一緒に歩いた。

次は踊りの練習。クマーリは森に教えてもらった“さくら”の唄のCDを用意した。

ク：「サダさん、この歌に合わせて踊ってみてください。」

サダはものの見事に踊った。昔の記憶は消えていないようだ。

クマーリは事務所へ行き備品の準備をする。カツラ（サダにはもう頭髪が少ない）、小道具。和服はサダの所有物を使う。

森：「クマーリさん、楽しそうだけど一人でできる？お手伝いしましょうか。」

ク：「はい、ありがとうございます。それでは案内状の作成をお願いします。」

森：「クマーリさん、あなたは本当に成長しましたね。私もあなたから習うことが多いわ。」

ク：「これも全部森さんのおかげです。本当にありがとうございます。」

クマーリは嬉しくて泣きそうになった。

介護豆知識 その37：「小道具」

施設にはいろんな小道具がある。レクリエーション用の道具、歌のCD、行事用の道具等々。

大半は施設側が購入するが、時には介護士が自腹で用意しているものもある。

介護士は介護のサービスを提供するだけでなく、あたかもエンターテイナーのように振る舞う場合も多い。演劇とまではいかないが、即興の演技も求められる。こんな時には小道具が欠かせない。

第24話 ～人生の意味～

場所：さくらホーム デイルーム

時間：その年の12月下旬 ある日の午後3時

物語：今日はいよいよサダの日本舞踊会が行われる。演目が“さくら”であるから出来れば来年の春まで待ちたいが、サダがそこまでもつかどうか不安なので12月中の開催となった。会場のデイルームにはティータイムを兼ねているので多くの利用者が集まっている。サダの息子家族も来ている。森が作った案内状は以下の通り。

「柴又が生んだ日本一の日本舞踊家 佐藤サダさん 人生最後の踊りを披露

演目は“さくら” どうぞみなさん、応援してください。」

定刻になったがサダの準備は長引いている。

あみ：「おばあちゃん、踊れるようになったのかな〜。」

た：「待っている間にお腹が空いたよ。」

ようやくサダがクマーリに支えられながらデイルームへと向かう。

サダは自分がかつて使っていた和服を身にまとい、カツラをかぶり、扇子を手にしている。顔には化粧。みんな拍手で出迎える。音楽も流れている。

CD：「さくら さくら やよいの空は 見わたす限り かすみか雲か 匂いぞ出
ずる いざやいざや 見にゆかん」

サダが音楽に合わせて踊りだす。驚いたことに背筋が伸びて別人のようだ。

た：「いよっ！日本一！」紙吹雪が飛ぶ。

クマーリはサダが「とうとうシバマタに会えたわ。これで本望。」と思っているように感じた。だから、クマーリも自然と踊りたくなった。

ク：「サダさん、私一緒に踊ってもいいですか。」サダは頷く。

クマーリは踊りだしたが、それは“さくら”ではなく、ネパールの踊りだった。

音楽は全く合っていないが、お構いなしだ。クマーリは嬉しくて泣きだした。

ク：「サダさん、シバマタはサダさんのことだったのですね。」

サ：「そうよ。クマーリさん、ありがとうね。」

二人はしばらくそのまま踊り続けた。観衆は二人の踊りが合っていないので笑うが、息子家族は涙をこらえることはできなかった。予定の時間が過ぎ、生活指導員の上田が壇上に上がり、

上：「サダさん、本当に今日の踊りは素晴らしかったです。あなたはこのホームの誇りです。」みんな拍手する。すると、途端にサダは卒倒する。

ク：「あ！大丈夫ですか。」と言って介抱し、そのまま個室へ連れて行く。

介護の豆知識 その38：「自己実現」

人生の意味を考えるのは自己実現を図るためである。では実現すべき自己とは何か。

自分とはどう違うのか。一般的には自己も自分も同じような意味であろうが、心理学者の

ユングは自己とは意識と無意識全体の中心だと言っている（自我は意識の中心）。すなわち、自己とは自分が意識するもの以外のものを含んだ広い意味での自分である。ユングによれば、人は無意識と意識とのせめぎ合いの世界を生きている。無意識はとても大きな影響を意識に及ぼすことがある。だから、きちんと無意識と向かい合う必要がある。この作業を彼は個性化と呼んでいる。これは単に個性を強く持つという意味ではない。それは個人主義であろう。そうではなくて、無意識を意識化することによってより豊かな人生を歩むことができるということ。かなり抽象的な話で申し訳ないが、ここでは具体的なことは書けない。皆さんも是非ユングの本を読んで欲しい。ユングの思想はすでに古臭い物になっているとも聞くが、私は心理学の中では一番介護と親和性があると直観している。特に、いわゆる認知症の介護とはぴったりと合う気がする。なぜなら、ユングの心理学は魂に特徴付けられているからだ。また、宗教的な要素もふんだんにある。本当に面白い心理学だ。

第25話　～終の棲家～

場所：さくらホーム　サダの個室

時間：その年の12月大晦日　夜

物語：舞踏会の後サダは眠りっぱなしであった。食事も取らなかった。医者の武藤が呼ばれた。サダの部屋には息子家族、施設長他スタッフが集まっていた。

突然、長い間音信不通だったサダの娘佐藤信子が部屋に入ってきた。

信子：「お母さん、起きて！死ぬのはまだ早いよ。」「お医者さん、このままだったら食べられなくなるから、胃ろうをお願いします。」

一郎：「お姉さん、突然何を言うんだ。お母さんはこれ以上長生きを望んでいないよ。」

信子：「どうしてそんなことがわかるの？」

一郎：「実はお母さんの遺書があるんだ。そこには無理な延命は不要と書いてある。」

一郎は遺書を見せる。これで信子は黙り込んでしまった。そして、しばらくして、

武：「みなさん、ご臨終です。時刻は夜の8時3分。」サダの死に顔は本当に清々しい。医者は白い布をサダの顔に被せる。

ク：泣きながら心の中で「あ！それはサダさんの誕生日と同じだ。」と叫んだ。

一郎：泣きながら「お母さん、一緒に暮らせなくて本当にすいません。でも、ここで最後まで暮らせて幸せだったね。最後に踊りも出来たしね。」

大：「ご家族にそう言っていただけますと、本当にありがたいです。」

上：「みなさん、最後の別れに“さくら”を歌いましょう。」

みんなでさくらを歌う。「さくら さくら ……」

その後クマーリと森とでサダの体を拭き、着替えをして、最後に顔に化粧を施す。

森：「私は家に帰ることにしますが、あなたはどうしますか。」

ク：「私はもうしばらくサダさんと一緒にいます。」森は部屋を出ていく。

クマーリは白い布を取り外して、サダの顔と対面した。

ク：「サダさん、こんなに早くお亡くなりになったのは、私のせいなのでしょうか。」もちろん、サダは答えない。

ク：「サダさんは踊ってシバマタになれて幸せでしたか？」

ク：「私も一緒に踊れて幸せでした。私も本当の自分に出会えたような気がしました。」

ク：「サダさん、私はこれからも日本で介護の仕事が続けます。これもサダさんのおかげです。本当にありがとうございました。」

クマーリはサダの両手をしっかりと握りしめて、何度も何度も頭を下げた。

おしまい

介護の豆知識　その39：「ターミナルケアと死生観」

今後介護施設でのターミナルケアが多くなる。これに適切に対処するためには医者・看護師のみならず、介護士もしっかりとした死生観を持つ必要がある。そんな難しいことは医

者に任せればいいでは済まされない。外国人介護士だってそうだ。日本人に負けないように学んで自分なりの死生観を持っていなければいけない。

今回の物語ではサダは倒れてから短期間で死亡することになっているが、実際はそのようなことは稀だ。通常は寝たきりになりながらも結構長生きする。でもこの間食が衰え、場合によっては自分の口で食べられなくなったりする。その場合胃ろうと行って、胃に穴をあけてチューブをつなぎ、そこから食べ物を流し込んだりする。そこまでして長生きをすべきなのか、といったとても難しい問題が本人、家族、医者、施設の間で議論されることになる。最近では本人が元気なうちに遺書や Living Will と行って、そのような最後の段階での医療や介護方針を予め表明していくケースも増えている。

介護の豆知識 その40：「介護は芸術」

私は介護豆知識その36で介護の芸術性に触れた。繰り返しとなるが、芸術とはお互いが自己を表現し合いながらその行為そのものを愉しむことだと考えるので、クマーリとサダの間の心或いは魂の交流も一種の芸術と言えよう。そう、介護はまさしく芸術なのである。だから、介護士は care worker (ケアワーカー) よりも care artist (ケアアーティスト) と呼んだ方がいいと思う。更に言えば、新しい介護を日本から世界に広げるという意味を込めて、Kaigo Artist と呼ぶべきであろうか。

番外編 ～天国での踊り～

場所：ホーム近くの公園

時間：翌年の春 桜の満開の時期

物語：ホーム恒例の花見見物。人数が多いので1回数人に分けて小型バスで公園に行く。

クマーリのグループには森が同行。利用者はたけし、よしの、大吉の3人。

公園には大勢の見物客が来て、それぞれ楽しんでいる。

公園の中心にある大きな桜の木の下でクマーリのグループは大きなマットを敷いて

座っている。真ん中でクマーリが施設のユニフォームを着たまま踊り始めた。

ク：「サダさんの霊と一緒に踊ります。」“さくら”のCDに合わせて踊りだす。

みんなも一緒に歌うが、

た：「サダさんって誰のこと？」

森：「たけしさんの奥さんだった人よ。」周りのみんなが大笑い。

クマーリは晴れわたった大空を見上げて、

ク：「サダさ～ん、天国でも踊っていますか？本当にありがとうございました。」

完

日本語テキスト Manga de Kaigo クイズ 解答集

クイズ 日本 その1：正解は4番

1番はインドネシア語、2番はネパール東端にある地名（ネパール人学生から笑いが取れるでしょう）、3番はフランス語、5番はポルトガル語です。

クイズ カイゴ その1：正解は5番です。4番で学生はちょっと不思議がるというか、そんなのあるの？という気持ちになるかもしれません。

クイズ 日本 その2：正解は5番。

テキストにある“ガイジン”さんを意識させる問題。3番の縄文（ジョウモン）人は約1万年前に住んでいた人々。4番の弥生（ヤヨイ）人は約2千年前に住んでいた人々。だから、これらは外国人とは呼べません。しかし、弥生人は元々中国及び朝鮮半島から来た人々で、現代の日本人の多くは弥生人出身ですから、本当の正解は4番の弥生人なのかも知れませんね。

クイズ カイゴ その2：正解は1番。老人ホームの内部は病院と良く似ています。でも、外観はマンションにそっくりだから、4番も正解にしてもいいでしょう。

クイズ 日本 その3：正解は5番。

日本人も外国人も人それぞれ違うという意味では同じであることが理解できればいいのではないのでしょうか。

クイズ カイゴ その3：正解は2番。

5番の回遊は「回遊券」とか「魚の回遊」と言う風に使われますが、徘徊とは結構近い意味ですね。老人ホームの回廊をぐるぐると歩きまわっている姿はまさしく「回遊」と言ってもいいかも知れません。

クイズ 日本 その4：正解は3番。「ダルバート」とは豆とご飯が特徴のネパール料理。

クイズ カイゴ その4：正解は5番。場所の見当識がないため、老人ホームのダイニングをレストランと勘違いすることはあり得るかもしれません。レストランではお金がないと食べられませんから、「お金がないために食べません」と利用者さんが言えば、それは正しいことになります。でもこんなことは滅多

にないと考えられますが、一応頭には入れておきましょう。

クイズ 日本 その5：正解は4番。正しいのはW. C. (=Water Closet) です。便所と呼ぶ人もまだまだいますが、厠や雪隠と呼ぶ人はいないかもしれません。また、小便を上品にお小水（しょうすい）と呼ぶ人も多いです。

クイズ カイゴ その5：正解は2番。食事は一日三回、入浴は週に二回、レクリエーションは一日一回、徘徊はあつたりなかつたり。でも、排泄は一日に数回、オムツの交換もあります。「排泄優先の原理」と主張している専門家もいます。

クイズ 日本 その6：正解は5番。常識的には納得がいく解答だとは思いますが、ひょっとしてお風呂に入れば頭が良くなるという医学研究があるかもしれませんね。

クイズ カイゴ その6：正解は1番。大変な作業を日本語では「骨の折れる」と表現しますが、実際折れるとすれば「腕」とか「足」の骨が多いのですから、4番、5番でも正解かもしれませんね。

クイズ 日本 その7：正解は4番と5番。部屋の中にいれば確かに安全ですが、賢明な行為ではありませんね。駅のプラットフォームで電車を待つ時、一番前に立って携帯をいじっている人が多く見られますが、これは本当に危ない行為です。万一酔っ払いに後ろから押されたらひとたまりもないですね。もしどうしても席に座りたい場合は、一番前に立っても体を電車が来る方向に向けましょう。そうすれば万一横から押されても踏ん張ることができます。

クイズ カイゴ その7：正解は3番。どうして「目」なのか説明することは難しいですが、感覚器官の中でも目が一番重要なことと関係があるでしょう。教科書には視覚情報は全体の8割を占めると書いてあります。ですから、精神的な負担のことを「負い目」と表現することになったのではないのでしょうか。

クイズ 日本 その8：正解は5番。国会で誕生日会が行われたというのは聞いたことがありませんし、常識では考えられないことです。でも、ひょっとして国会の中に秘密のカラオケがあるかもしれませんから、5番が絶対正しいとは言えません。

クイズ カイゴ その8：正解は2番。障害の順番も通常は時間が最初で次に場所、最後が人になるようです。計算ができなくなるのは思考力の障害、言葉が話せなくなるの失語、臭いとか音楽がわからなくなるのは感覚障害で、見当識障害とは呼びません。

クイズ 日本 その9：正解は5番。加速はカソクと読みますのでカゾクではありません。

クイズ カイゴ その9：正解は4番。介護者は家族から反対されることを行っ
てはいけません。もし反対されることを強行して、何か問題が発生した場合、
家族から訴えられる可能性があります。

クイズ 日本 その10：正解は4番。この報（ホウ）・連（レン）・相（ソウ）
は繰り返し教える必要があるでしょう。

クイズ カイゴ その10：正解は2番。文法的には2番の困難が正解ですが、
実際問題としては5番の悲劇が一番正しいかもしれません。

クイズ 日本 その11：正解は5番。1番、2番と4番をされると怖いです
ね。3番ですが、実は黙って辞める人が多いのも現実です。でもこれは、会社
に迷惑をかけるだけではなく、辞める人間の価値を下げることになりますから
絶対してはいけません。なお、辞表は退職願とも言います。

クイズ カイゴ その11：正解は1番。2番は神様の前で踊る女性。3番も
間違っ
てはいませんが、総合的には1番のエンターテイナーが正しいでしょう。
4番の作曲家はありえないですね。5番は行事運営の経営者のことです。
でも、エンターテイナーという単語は英語をそのまま訳しただけなので、何か
適当な和語はありませんか？

クイズ 日本 その12：正解は2番。1番のやさしい、4番の正直は共感す
るための基礎的な資質です。5番の傾聴は共感するための技術。2番は資源保
護の問題ですから直接共感とは関係がありません。でも、「地球にやさしい」と
いう意味では共感に近い意味かもしれません。と言っても世界の中で日本人が
環境問題に特別関心が高いということは言えませんね。

クイズ カイゴ その12：正解は5番。1番：メガネが必要ない人もいます。2番：化粧もしない人もいます。3番：服は「付ける」とは言いません。「着る」ですね。4番：お金を「付ける」とは言いません。「得る」「稼ぐ」「使う」ですね。

クイズ 日本 その13：正解は5番。1番2番3番は文句なしに日本文化ですが、4番の極道はどうして？と思われるでしょう。極道の代表として「ヤクザ」が挙げられますが、「ヤクザ」の生き方や社会的存在には日本社会の在り様が反映されていることを考えますと、極道もその意味では日本文化に当てはまると言えます。5番の国道は国家が管理する道路ですから文化ではありません。

クイズ カイゴ その13：正解は2番。1番はちょっと悪ふざけな解答。3番4番5番はすべて心に関係する単語で正解に近いのですが、日本語では「気分転換」が熟語としてあります。ちょっと難しかったかな。

クイズ 日本 その14：正解は4番。1番の風船バレーは老人施設等でしか行われませんが、れっきとしたスポーツです。2番のママさんバレーは御婦人だけのものですが、日本では大変盛んです。3番がバレーの正式名称です。4番のバレエは舞台芸術ですね。5番のパラグライダーは山上から飛び降りるスポーツです。

クイズ カイゴ その14：正解は3番。1番の頭は「見せる」ではなく「使う」ものです。2番の脚は「見せ」てもよいですが、この場合は不適切です。4番の舌は「見せる」ではなくて、「出す」「切る」「かむ」です。5番も目は「見る」もので「見せる」ものではありません。このように日本語には体を喩えにした言い方がたくさんあります。

クイズ 日本 その15：正解は5番。1番4番は英語、2番3番はポルトガル語で、5番は「馬鹿」なので日本語です。

クイズ カイゴ その15：正解は5番。1番から4番はよく行われますが、5番の政治家演説は通常行われませんね。これは老人施設だけではなく、普通の会社でも政治活動は通常行われません。しかし、選挙の時経営者が自分の応援する政治家に投票するよう社員に働きかけることはよくあります。

クイズ 日本 その16：正解は5番。この問題は解説不要ですね。

クイズ カイゴ その16：正解は4番。さすがに老人達を団体でお墓に連れていくという愚かなまねはしませんよね。でも、個人的に墓参りに行く利用者はいるかもしれません。

クイズ 日本 その17：正解は1番。カツラも顔の整容という意味では化粧に近いですが、一応化粧とは別の範疇です。

クイズ カイゴ その17：正解は3番。認知症になると思考能力が低下しますから理性などを追及するよりも、反対の感性を引き出すことが大切です。

クイズ 日本 その18：正解は2番。一人相撲とは自分だけのことを考えて行動することですから、チームワークに反します。他の番号の内容は是非しっかりと身につけてほしいです。

クイズ カイゴ その18：正解は5番。電話するはADLではなくて、もう少し複雑な行動なので手段的日常生活動作 I ADL (=Instrumental Activity of Daily Living) の一つです。

クイズ 日本 その19：正解は4番。1番の以心伝心とは話さなくても心は通じるということ。2番の腹芸 (はらげい) とは言葉でなく表情で伝えること。3番は以前流行したビール会社の宣伝文句で、日本男子の寡黙さを用いたもの。4番の腹話術はあたかも人形が話しているように見せる芸であり、話が苦手ということとは関係がありません。5番は他人より目立つとあとで仕返しがかかるということで、日本人が話したがらない理由の一つです。

クイズ カイゴ その19：正解は2番。1番の会話は正解でもいいですが、正確には対話という表現を使います。2番の傾聴は **positive listening** の訳です。3番ですが、対話ボランティアも福祉活動ですから正解かもしれませんが、この場合は対話 (傾聴) ボランティアと言います。4番のカウンセラーですが、通常カウンセラーとは心理学カウンセラーのことですので、呼ぶとしてもそれはボランティアではなくて専門家となります。5番の教師ですが、話し相手となるだけで別に教えるわけではありませので不適當です。

クイズ 日本 その20：正解は5番。「わたし」の「わ」と「た」を入れ替えると「たわし」になりますが、「たわし」は掃除に使う物で「私」とは関係がありません。

クイズ カイゴ その20：正解は1番。「生きる」と「死ぬ」ことは対立的な考え方ではなくて、実は同時進行するものであるから同じなんだよということ言いたいので、正解は1番ですが、実は「自分らしく生きる」ことは人生を「楽しむ」「喜ぶ」「癒される」ことにつながりますから、3番から5番もすべて正解とも言えます。なお、2番の「息をする」ですが、生きるためには「息をする」必要がありますから、正しい生き方には正しい呼吸法が大切であることは言うまでもありません。

クイズ 日本 その21：正解はなし。1番の富士山は日本一高い山で標高3,776メートル。2番の金閣寺は金箔で有名な寺。3番の新幹線は世界一安全な高速鉄道。4番の源氏物語は世界一古い恋愛小説。5番の平和憲法とは現行日本憲法のこと、第9条に戦争放棄が謳われていて、一部の日本人はそれを世界に誇る平和憲法だと考えています。狭い意味では宝物とは言えませんが、広い意味では宝物と言えます。

クイズ カイゴ その21：正解は2番。英語の **biorhythm** で、体の周期的リズムのことです。夜勤と日勤を交互に繰り返しますと、体のリズムが狂ってしまうは当然です。ですから、介護士の仕事は大変なのです。1番の体調ですが、「体調が崩れる」「体調が悪くなる」と言います。3番「体温が変化する」4番「血液循環が悪くなる」5番「体重が変化する」「体重が増減する」。

クイズ 日本 その22：正解は5番。相手の話を聞かないで自分の話だけをした方が早く会議が進むようにも思えますが、もちろんこれでは会議の意味がありませんので、必ず相手の話を聞くようにしましょう。

クイズ カイゴ その22：正解は3番。芸術の定義は難しいですが、お互いが自己表現をしながら、その体験そのものを愉しむことも一つの芸術行為ではないでしょうか。この意味で介護そのものも一つの芸術行為だと言えます。

クイズ 日本 その23：正解は2番。すべて事実としては正解ですが、映画の題名としては「男はつらいよ」が正解です。

クイズ カイゴ その23 : 正解は4番。他のものに関する道具もありますが、文面の意味からしてレクリエーションが正しいです。

クイズ 日本 その24 : 正解は5番。音楽は踊りとは関係が深いものですが、踊りそのものではありません。それ以外はいずれも日本の伝統的舞踊です。

クイズ カイゴ その24 : 正解は1番。それ以外の学問特に5番の医学を学ぶ必要はありますが、人生の意味に関する学問と言えば1番の哲学です。

クイズ 日本 その25 : 正解は3番。5番の元気寿命でも正しいようですが、正式には健康寿命と言います。4番のネットとは「中味」という意味ですが、この場合は使用しません。

クイズ カイゴ その25 : 正解は4番。すべての「観」は必要ですが、ターミナルケアすなわち看取りは死と生のはざまでの事柄ですから「死生観」と言います。2番の宗教間も近い意味ではありますが、必ずしも宗教が必要だとは言えません。3番の人生観も間違いではありませんが、それは死生観を含む全体的な言い方です。1番と5番はこの場合はあまり関係がありません。

おしまい

日本語テキスト

Manga de Kaigo

付録

2016年12月1日 初版第1刷発行

発行 特定非営利活動法人 地球市民協力隊

〒153-0044 東京都目黒区大橋 1-7-10

著者 海陽光二

著作権 株式会社ニューグローバルズ

〒153-0044 東京都目黒区大橋 1-7-10

© Newglobals Inc.

本書の無断複写、転載、複製を禁じます。